



## 講座のアピールポイント

高齢化が進み健康長寿を目的とした健康維持や医療手法の重要性が増すとともに、ロボット支援手術や新しい腹腔鏡手術の技術、レーザー手術などに適応可能な診療・医学教育が求められています。当センターは、手術支援ロボットや内視鏡的外科手術などの低侵襲治療を安全に行うために、外科医やコメディカルがひとつのチームとして積極的に情報交換を行い、技術の向上に努めています。当院にはロボット手術認定資格医が25名在籍（2021年4月現在）しており、万全の体制で手術に当たっています。



ロボット支援手術は従来の開腹術に比較し、術中の出血量が格段に少なく、切開する傷口も小さいのが特徴です。術後の痛みも軽減され、回復も早いので入院期間を短縮できます。低侵襲治療センターを通じて最新医療技術を取り入れ、患者さんが低侵襲で最適な治療方法が選択できる患者満足度の高いセンターを目指しています。

## 講座研究紹介

高齢化、高ストレス社会の中で、生活習慣病、糖尿病、メタボリック症候群、認知症などのリスクが深刻化しています。特に認知症は自覚症状がないまま進んでいるため、日常的な健康管理や早期診断が最も重要です。例えば前立腺癌患者においては、男性ホルモンを遮断するアンドロゲン除去療法が行われます。前立腺癌は高齢者が多いため、治療前にすでに認知機能が低下している恐れがあります。また、アンドロゲン除去療法により、さらに認知機能は低下します。手術でも全身麻酔をかけると、術後認知機能が低下することがわかってきています。現在、認知症のスクリーニングは問診票であるMini Mental State Examination (MMSE)、改訂長谷川式簡易知能評価スケールなどが用いられています。しかし、認知症が軽い、あるいは初期の症例では発見がむずかしい問題があります。現在、大阪大学と株式会社ケンウッドが共同で、高次脳機能障害患者でみられる特有の「目の動き障害」に着目し、視線検出技術を用いた診断機器を応用することで、簡便性・低侵襲性・客観性・定量性を兼ね備えた高次脳機能障害の新規診断法の開発を行っています。方法としては数分間モニター上に映し出される映像を注視する被検者の視線の動きを赤外線カメラで追跡します。映し出される映像は、注視点（どこを見ているか）をモニターすることにより、被検者の眼球運動、記銘力、注意力、空間認知機能を評価できるように構成されています。この装置を前立腺癌のアンドロゲン除去療法を受けている患者さんや手術を受ける患者さんに応用することで、正確かつ簡便に認知症が診断ができるか検討しています。

